

報告

Heart Failure 2024 参加レポート ～リスボンを駆ける～

笠原信太郎

国立病院機構仙台医療センター 循環器内科

(2025 年 9 月 9 日受稿、2025 年 9 月 9 日受理、連絡先：笠原信太郎・仙台医療センター 循環器内科)

2024 年 5 月 11 日から 14 日までポルトガルのリスボンで開催された Heart Failure 2024（欧州心不全学会学術集会）に、専攻医 S 先生と研修医 O 先生とともに参加した。日本からポルトガルへは直行便がなく、乗り継いで行くため、往路は 22 時間かかった。ひとたびリスボン空港に降り立てば、地下鉄に乗ってリスボン市街地にはすぐ着く。5 月のリスボンは晴れ渡り、煉瓦色の屋根の街並みと鮮やかな紫のジャカランダの花が美しい。

リスボンは 7 つの丘の街と呼ばれており、高低差のある土地を移動するには縦横無尽に走る路面電車が便利である。サン・ジョルジュ城の丘から細い路地を縫って駆け下りるレトロな路面電車はジェットコースターのアトラクションさながらである。学会場（Lisbon Congress Centre）は市街地中心部から西へ 5km ほど離れたところにある。学会場へもまた路面電車で移動が可能だが、テージョ川沿いのカイス・ド・ソドレ駅から平らで真っすぐな道を、5 両編成の新型車両が走るため快適である。

欧州心不全学会（HFA）は欧州心臓病学会（ESC）の傘下である。ESC 学術集会ほど巨大ではないが、今回の Heart Failure 2024 にも数千人が参加していると思われ、活気があった。LBCS（Late Breaking Clinical Study）のセッションのなかで、心不全のモニタリングについての 2 つの研究が印象的だった。一つはフランスからの報告で、症状と体重を入力してリスクをスコア化する遠隔モニタリ

ングアプリケーションの研究。もう一つは肺動脈内にデバイスを留置して肺動脈圧を遠隔モニタリングするという研究。いずれも有用であるという結果であったが、一方は問診のみのデータ（非侵襲的）、もう一方は体内にデバイスを留置して得るデータ（侵襲的）、を使用する点において対照的である。

学会場を見回して気付いたことは、女性の参加者が多いことである。5 割ほどは女性である。多職種が参加しているとはいえ、日本の循環器系の学会では参加者の大半が男性であることと比べると、欧州では女医の割合も高いのだろうと感じた。

コロナ禍以前の 2018 年にウィーンで開催された Heart Failure 2018 で演題発表した際は紙のポスターであったが、2024 年現在、モニター画面に映し出される電子ポスターに取って代わられた。この e ポスターはオンライン参加者も自身のパソコンで閲覧可能である。筆者の発表は、心不全多職種チームによる疾病管理が急性心不全患者の短期予後を改善させる、という研究内容である。自身のポスターの前に立っていたところ、メキシコの研究者から質問を受け議論を交わした。当院と同様に心不全患者への疾患指導を行っているとのことであり、地球の反対側でも同じような医療の取り組みが行われていると知り、励みとなった。

学会場から路面電車に揺られてさらに西へ行くと、ベレンに着く。世界遺産のベレンの塔とジェロニモス修道院がある。近くにはナタ（エッグタルト）

の元祖の店があり、S 先生はその美味しさに大満足していた。S 先生はお酒を飲まない代わりにスイーツ食べ歩きを楽しんでいた。一方、元陸上部の研修医 O 先生は毎晩ポルトガルワインを飲みつつも、早朝は石畳の丘でランニングに勤しんでいた。

世界遺産といえば、さらに西にはシントラという街があり、文化的景観が世界遺産に登録されている。王家の夏の離宮であったペーナ宮殿は、おとぎ話に出てきそうなほどカラフルでメルヘンチックだ。さらにさらに西にはユーラシア大陸最西端のロカ岬が

ある。最終日にロカ岬を訪れ、大西洋の水平線を眺めていたら、サウダージ（ポルトガル語：saudade）を感じた。ユーラシアの東の果ての日本から眺める太平洋と似ていた。Adeus と呟き、帰国の途についた。

コロナ禍を経て久しぶりに参加した海外学会であった。若い専攻医、研修医とともに、心不全に関する最新のグローバルな知見を学ぶことができた。ポルトガルの文化にも触れることができた。今後の臨床、研究の糧としたい。